

2024年度 自己推薦入試

試験問題

文学部 英語英文学科

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
2. 試験開始の合図があったら、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入してから問題にとりかかること。
3. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入すること。
4. 試験時間は、9時30から10時30分までである。
5. 試験終了後、答案を回収する。問題冊子は持ち帰ること。

白百合女子大学

以下の文章は小池生夫編著『提言 日本の英語教育』（2013年、光村図書）からの抜粋です。これを読み、この文章の最後の文の下線部の問いかけに対してあなたの意見を800字以内で述べてください。

（注意）本文に書かれている内容と関連させて意見を書くこと。

今あなたのクラスに、英語を声に出すのが大好きで教科書の本文をいくら音読しても飽きることがない生徒たちがいる。その反対にいくら音読をしろと言ってもまったくやろうとしない生徒も同数いる。このときに、音読を30回やったらご褒美をあげるという提案をあなたがしたらどうなるだろう。ご褒美の程度にもよるが、音読がきらいな生徒は以前より真剣に練習するようになるだろう。報酬によって外発的動機づけが高められたからである。では、元々言われなくても音読をやっていた生徒は、このような報酬によってさらに音読をするようになるだろうか。実は、このような生徒にとって報酬は、かえって意欲を奪ってしまう危険性を孕んでいるのである。

これは、1970年代に内発的動機づけに関する実証研究から示されてきたことでアンダーマイニング効果と言われるものである。デシ(Deci, 1971)は、自分の実験のために、夢中になってしまうパズルを学生に与えておいた。そうしたところ、学生たちは見事にそのパズルに「はまって」しまい、なんとしても自力でパズルを解いてやると、やる気満々になった。その後、その学生たちを2グループに分け、片方のグループにだけパズルが1つ解けるごとに報酬を与えた。すると、最初はあれほどはまっていたパズルに対して、報酬をもらったグループの学生はもはや自発的にパズルを解こうとしなくなったのである。このようにもともと内発的動機づけから行動を起こしていた者に外発的動機づけを与えると意欲が減退してしまうことが見られた。（中略）

ここで先程あげた音読の例について考えてみよう。元々音読好きの生徒にとってご褒美を与えるのはあまり意味がないばかりか、せつかくの意欲に水を差す心配があるので、ご褒美を与えるのは控えておくことにしたほうが良いだろう。では、音読をしたがらない生徒に対してはどうしたらいいだろうか。ご褒美など与えないで、内発的動機づけの大切さを懇々と説いていくべきなのだろうか。デシ自身はなかなか内発的動機づけを持ってくれない者には報酬など外発的に動機づけるという手法もありだと考える。特に学習の初期段階では、むしろ外発的に動機を高めていく方法が有効であると認めている。つまり、すべての人を一様に扱うのではなく、人を見てどのアプローチが有効なのかを判断すべきなのである。ただし、デシは内発的動機づけが低い者に報酬を与え続けることを推奨しているわけではない。外発的動機づけはあくまでも入り口であって、実際に行動に移していく過程で徐々に内発的動機づけを持つように導いていくことが重要だと主張している。

このようにデシは内発的動機づけの重要性を強調しつつも、外発的動機づけの役割を排除はしなかった。それよりも、自己決定性という概念に基づいて両者を統合的にとら

えたモデルを提唱した。これが自己決定理論 (Self-determination Theory) である。

(Deci & Ryan, 1985) この理論の中で、内発的動機づけをより自律性 (autonomy) または自己決定性 (self-determination) の高いものとして捉えている。自律性、あるいは自己決定性とは、自ら目標設定をし、自分の意志で行動することを決定することを表している。ライアンとデシ (Ryan & Deci, 2000) では、人間は基本的に自律心と自分のことは自分でやりたいという欲求を持っていると指摘している。内発的動機づけによる行動が起きるためには、学習行動をすることを自ら選択するという自律性が不可欠である。それを欠いた学習行動は、単に「やらされている」というだけで、自己の内部から意欲が湧いて起こした行動とは本質的に異なるのである。

日本の英語教育では、強烈な外発的動機によって英語学習を維持してきたという側面がある。高校・大学等の入学試験の英語テストで高得点を取らなければ、あるいは英検やTOEICなどの資格試験で高得点を取らなければ社会的に有能な者として認知されない仕組みがこの国にはまだ根強く存在している。

問題は、そういうテスト勉強を通じて得た英語能力と一般社会でコミュニケーションを行うための英語能力に大きな乖離があることである。それでもなお、高校生は試験のための英語能力を優先し、大学生は資格試験のための勉強に明け暮れている。そして、入学や就職をした途端に英語の学習をしなくなってしまう。外発的動機がほとんどすべてという学習者なので、その動機元である試験が終わってしまえば、学習をやめてしまう、それは、ある意味とても理にかなった判断なのである。

彼らの英語学習をつなぎ止め、真にコミュニケーション能力を備えた人材へと育成するためにはどうしたらよいのだろうか。

倉住修「学習意欲とは」